令和５年度海洋水産資源開発事業（沖合底びき網（かけまわし）：青森県太平洋海域）の調査概要

調 査 船：第六十二新生丸（144 トン）
　　第五十五興富丸（138 トン）
調査期間：令和５年４月１日～令和５年５月 31 日
調査海域：青森県太平洋海域

調査の目的

青森県太平洋海域の水深 300～900 m の漁場（深場漁場）における未利用・低利用資源を対象に、安定した漁獲を得るための漁場の評価と漁具漁法の改善による操業の最適化を行う。さらに、未利用・低利用資源の利用を促進するための流通や利用加工の適正化を目指す。これにより、沖合底びき網漁業の漁獲から流通加工までを通した生産体制の多様化を図る。

本年度調査の主な成果等

八戸地区の沖合底びき網漁業の漁期（9 月～翌年 6 月）中で水揚げ量が比較的少ない春季（4 月～5 月）に、深場漁場の未利用・低利用魚（深場資源）を対象とした漁場の探索・操業を行い、主要魚種の分布と入網量を調べた。その結果、イトヒキダラ（図 1）は主に尻屋崎の海峡部、白糠沖および六ケ所沖の水深 400 m で入網した。テナガダラやムネダラ等のそこだら類は主に尻屋崎から六ケ所沖に至る海域の水深 400～600 m 付近で入網した。1 日 1 隻あたりの入網重量はイトヒキダラが約 15 kg、そこだら類が約 156 kg であり、いずれも練り製品原料として必要とされる 1 航海あたり 5 トン程度の供給量に達しなかった。深場資源の一部を試験販売したところ、各魚種の単価は、イトヒキダラ 21～30 円／kg、ムネダラ 43 円／kg 以下、テナガダラ 27 円／kg、オニヒゲ 31～43 円／kg であった。深場資源で多く入網した魚種はココノホシギンザメとげんげ類であり、1 日 1 隻あたりの入網重量はそれぞれ約 580 kg と約 910 kg であった。このうち、げんげ類の一部を試験販売し、その単価は 50 円／kg であった。

図 1 イトヒキダラ

操業の最適化を図るための知見を得るために、今回調査船とした当業船が通常操業で使用する漁具に水深 900 m までの耐圧性能を有する浮子を装着した上で、操業中の漁具の各部位の深度履歴や網口高さ、手木間隔の変化等の基礎データを深度計と間隔計によって計測した。これらを整理し、今後の操業方法の改善に繋げる。

当該海域の未利用魚の知名度向上と利用促進に向けた取り組みとして、青森県産業技術センター食品総合研究所との共同研究により、イトヒキダラ、そこだら類、ココノホシギンザメおよびげんげ類の加工品を試作した（図 2）。今後、これらを加工業者にも紹介していく予定である。

図 2 試作した加工品（シロゲンゲの蒲焼）

© Copyright Marine Fisheries Research and Development Center(JAMARC),Japan Fisheries Research and Education Agency All rights reserved
https://www.fra.go.jp/jamarc/